木工

自然風土の豊かな我が国では、さまざまな樹木が育ち、工芸材料として使用されてきました。その中で三宅島や御蔵島に産出する桑は、島桑と呼ばれ、江戸指物においては良材として特に珍重されました。近代に入ると、特に桑材を用いた指物を得意としたことから「桑樹匠」と呼ばれた指物師たちが活躍しましたが、彼らが島桑を多く用いたことで、銘木として広く知られるようになりました。ここでは、島桑を用いた江戸指物の伝統を引き継ぐ作品のほか、同じく江戸の技を伝える黄楊櫛や、近代期に富山に伝えられた木象嵌技法を用い、独自の造形表現を切り開いた作家たちによる額装の作品等を紹介します。

1 ── 北海道・釧路
白樺皮絵額　釧路郷土工芸品研究所
昭和11年(1936)

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

工芸風土記　弐 ― 木・竹・漆工の世界
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 31

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十五年七月五日発行

©2003, Museum of the Imperial Collections